

〔落窪物語〕雨はいやまさりにまされば、○中 笠ひとつまうけよ、衣ぬぎてこんとて入たまひぬ、

たちはきかさもとめにありく、○中 たちはきとたゞ二人出給ひて、大がさを二人さして門をみ

そかに明させ給ひて、いとまのびやかに出たまひぬ、○中 雑色等、この退る者どもまばしかへり

とまれ、○中 とて、かさをほとく、どうてば、屎のいと多かる上に屈まり居ぬ、また打はやりたる

人、まひて此かさをさしかくして、顔をかくすはなぞとて、往過るまゝに、大がさを引かたぶけて、

かさにつきてくそのうへにゐたるを、火をうちふりて見て、奴袴著たりける身まづしき人の思

ふ女の許いくにこそなど、口々にいひておはしぬれば、○下

〔後撰和歌集〕十四 男のまでこで、ありく、てあめのふる夜、おほがさをこひにつかはしたりけれ

ば、
これひらの朝臣の女いまさき○歌

〔松の落葉〕四 笠

かさのしなくさく、あり、よき人のほ、きぬがさ、おほがさになん、○中 おほがさのこと、すぎにし

文化八年のう月に、京にまゐりをりしかば、かもの祭見にゆきしに、勅使、菅のおほがさをもたせ

られき、ことしよりはじまれるなりとぞ、みやこ人いひける、そは久しくすたれたりしを、おこし

たまへるにぞありける、西宮記十一の巻に、菅笠、公卿及祭使御禊前驅持之、白鳳制云、三品とある

によりて、ものしたまへるにこそ、菅にては、つくりたれど、きぬがさにつぎては、これもいとやん

ごとなきかかさなりかし、まもまにては、むかしも今もなべてちひさき菅笠をぞきる、

〔下學集〕下 器財、サシカサ 傘、持手謂之傘也、墨傘唐傘 是也、以字、形、可知之云云、

〔事物紀原〕舟車帷幄 傘

通典曰、北齊庶姓王儀同已下翟尾扇傘、皇宗三品已上青朱裏、其青傘碧裏、達於士人、按晉代諸臣皆乘車、有蓋無傘、元魏自代北有中國、然北俗故便於騎、則傘蓋施於騎耳、疑是後魏時始有其制也、